フランス哲学と京都学派 —— 司会者による後書き

川口 茂雄

明治以降の日本の“哲学”思想の展開は、いわゆる京都学派がその輪郭を取り始める以前の時期からも、フランス哲学との遭遇・対峙によって賦活されていた面が多くある。そのもっともくっきりとした現われの一つとして挙げられるのは、中江兆民（1847－1901）という存在であろう。1871 年、すでにフランス語を学んでいた兆民は、岩倉使節団に伴い、アメリカ経由でヨーロッパへ向かい、そしてパリおよびリヨンで約二年間の滞在をした[1]。その滞在中の仔細は必ずしも詳らかではない。だが、いずれにしても、徳川時代生まれの二〇代の若者が日本列島を離れ、フランスに居住したことによって受けえたであろう刺激や動揺は、察するに、大変な強度のものであったと、考えられよう。

1886 年（明治 19 年）に著された兆民の『理学鉤玄（こうげん）』は、本邦最初の哲学概論書とされる[2]。当時、すでに西周が“哲学”を造語しており、またその語は一定程度流布もしてはいたのであったが、“哲学”（兆民は「理学」と訳す）について哲学的に、ないし哲学的な水準で、語ることをなしえたのは、兆民のこの書が初めてであったとみなされる場合が多い。『理学鉤玄』は、著者が自身の思想を述べるという種類の書ではなくて、西洋哲学の諸潮流を、客観的に分類解説することを試みたものである。しかし兆民はそこで、単なる言葉上の翻訳にはとどまらない、積極的な洞察と理解を含んだ記述を展開した。

ところで、『理学鉤玄』の文中にはカタカナで原語を示すルビが多くふられているが、それらは、いずれも典拠がフランス語であることを示している（人名の読みも「ユーム」や「スチュアール・ミル」というように、フランス語風の読みで表記されている）。ここでは、兆民が「理学」の理学たる当のゆえんを論述している箇所を、引用しておこう。西洋哲学の根本諸概念・諸潮流を、フランス語という形で兆民が摂取したさまが、彷彿として浮かび上がるところである。

……尋常学術ト理学トハ決（けっし）テ相混ズルコトヲ得ズ、蓋シ所謂尋常学術トハ、曰ク算数（マテマチク）ノ学ナリ、曰ク物性学（フィジック）ナリ、曰ク物化学ナリ、曰ク医学ナリ、曰ク法学ナリ、其他一切一科ノ事項ヲ講究スル者ハ皆尋常学術ナリ、

……若夫（もし）レ理学ハ然ラズ、其旨趣タル必ズ諸種学術ノ相通ジテ原本スル所ノ理ヲ講究シテ以テ事物ノ最高層ノ処ニ透徹スルニ在リ、所謂最高層ノ理トハ何ゾヤ、之ヲ例ヘバ天地日月禽獣虫魚、凡ソ動植ノ属吾人ノ耳目五官ニ呈スル者、之ヲ名（なづけ）テ実質（マチエール）若クハ実体ト曰フ、然ルニ此等実体ノ采色若クハ声色若クハ形貌若クハ軽重、実ニ其本相ニシテ空幻ニ非ザル乎、即チ物ノ色ノ如キハ独リ吾人ノ目ニ接スルニ由テ発スル者ニシテ、物実ニ之レ有ルニ非ル乎、又吾人ノ身ノ如キモ其感覚シ思念シ及ビ決

断スルハ独リ頭脳ノ機関（オルガニスム）ノ然ラシムル所ナル乎、将（は）タ虚霊不昧（スピリチュエール）ノ精神ナル者有テ一身ノ主宰ト為リテ此等ノ能力ヲ発スト為ス乎、斯天地万有ハ本ト之ヲ造ル者有リテ生ゼシ乎、将タ偶然トシテ発シ突如トシテ来リタル乎、世界万物ハ皆個々円成シテ乃チ各々独立不倚ナル乎、将タ一個ノ本根（シュブスタンス）有リテ皆之レニ統属スト為ス乎、吾人善ヲ為シ悪ヲ避クルハ吾人ノ心実ニ自ラ決断シテ然ル乎、将タ知ラズ識ラズ外来ノ目的ノ為メニ牽引セラレテ然ルト為ス乎、

凡ソ此等ハ皆所謂事物最高層ノ理ニシテ之ヲ窮究スルハ即チ理学ノ事ナリ、

是故ニ理学ハ凡ソ学術ノ中ニ就イテ最広博ニシテ最高遠ナル者ナリ、古来諸説ノ相容レザル者続々発シ来リ、其最相類（あい）スル者ト雖モ細（こまか）ニ之ヲ察スルトキハ必ズ相異ナル所有ルヲ見ル……[3]

ヨーロッパの文化の精神的巨大さに圧倒されつつも、ただ圧倒され茫然とするのみにはとどまらず、驚異的というほかない語学力で、それを研究し、理解しようと苦闘した明治期の思想家らの置かれていた知的状況には、やはり、今日のわれわれの想像を超えるような何ものかがあったように、感じさせられざるをえないところがある。しかし、近代化――いまここでそれについて立ち入って論じることはできない――という奔流、それを、後世の視点から学的に捉え、客観的に解釈しようとする際には、むろん十二分に想像力を稼動させることは必須となろうが、だがそれだけでも足りない。

近年、“日本思想史”等といった学科枠組みにおいて、明治～昭和期における京都学派等のいわゆる日本哲学についての研究が、さかんに取組まれている。だが、西洋哲学について（またドイツ語・フランス語等の言語について）必ずしも適格な知識の量・質を伴わない形で行われているように見えるそうした種類の研究には、若干、懸念を感じないでもないところがある。はたして、明治期知識人の精神の内部における葛藤と動揺を、そしてそこから発露してくる思想のエネルギーを、西洋思想との対峙の現場を自ら再現・追体験する手段を十分に確保していない研究者が、理解し、解釈することができるであろうか？ また、とりわけ、西洋哲学の徹底的な理解によって足腰を固めた、京都学派の思想家らの思索の哲学的強度に肉迫することは、可能なのであろうか。

今回の、佐藤啓介氏によって組織されたパネルには、様々な豊かな問題提起が織り合わされていたのであったが、加えてそうした、おそらく残念ながらいささか安易と言わざるを得ないような、或る種の“日本思想史研究”が採る手法の平べったさに警鐘を鳴らすという意図も、ひとつ含まれている。

もっと立体的で、もっとダイナミックで、容易に立脚点も定めることのできないような（“西洋”とか“東洋”と言って図式的に済ませてしまうこともできないような）、苦闘に満ちた思想空間を、近代日本の思想家たちは生きていたのではないのだろうか。そして、彼らが提出したひとつひとつの理論上の結論というよりも、むしろ、彼らをして哲学への渇きを覚えさせ、やむにやまれず思索するよう衝き動かしていたもの、彼らが抱えざるをえなかった葛藤、そうしたものが、露わにされることが必要なのではないのだろうか。葛藤の解決策として提示されるものどもよりも、葛藤の現場そのものが、注目に値するのである。しかるに、彼らが西洋思想を理論的結論において何らかの点で乗り越えたかどうか、というような問いは、無論意義のある問いではあるが、他面、どこか性急で、暗黙の前提が多すぎるようにも思われる[4]。むしろ、彼らが思索した、ないし思索せざるをえなくさせられた場、その場はどのようなものであったのか、その場に孕まれた緊張はどのようなものであったのか、これがまずあらためて問いただされなければならないで

あろう。フランス哲学との遭遇・対峙は、まぎれもなくそうした緊張、緊迫の場の一つであったように考えられる。

---

[1] この頃は、政治史的にいえば、ドイツ軍によるパリ包囲やコミューンの勃発・鎮圧といった出来事の相次いだ、第二帝政から第三共和政への移行期にあたる時期であり、哲学史的には、ラシュリエの主著『帰納の基礎*Du fondement de l'induction*』が公刊された時期ということになる。

[2] ちなみに、西田は四高の学生時代に、他の同世代の若者らと同様に、『理学鉤玄』を読んで知識を得、様々に影響を受けた、というのが定説である。

[3] 『中江兆民全集』第７巻、岩波書店、14-16 頁．この書で兆民が直接的に参照し参考にしているのは主としては、エクレクティスム＝スピリチュアリスム派のジュフロワ（Th.Jouffroy, 1796-1842）、ポジティヴィスム派のリトレ（E.Littré, 1801-1881）、そしてフイエ（A.Fouillée, 1838-1912）等といった思想家らの著作とみられる。

[4] これに近い趣旨での、昨今の“日本哲学史研究”への批評としては、参照、杉村靖彦「書評：Ｊ．Ｗ．ハイジック編『日本哲学の国際性』」、日本宗教学会『宗教研究』、第 81 巻第 1 輯、2007 年、172-178 頁．

※本稿は、『宗教学研究室紀要』へのパネル企画内容の掲載にあたって、パネリストからの要請により、後日書き下ろしたものである。